
インフィニット・ストラトス～舞い降りるコジマの天使～ザ・アクアビットマン

りょうすく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インファイニット・ストラトス〜舞い降りるコジマの天使〜ザ・アクアビットマン

【Nコード】

N6082X

【作者名】

りょうすく

【あらすじ】

インファイニット・ストラトス

IS、一人の天才が開発したパワードスーツである。従来の兵器をはるかに上回る性能を持つこのパワードスーツには欠点があった。それは、女性にしか動かすことができないというものであった。このことにより、男女平等になりつつあった世界は、一気に女尊男卑の社会となってしまうた。しかし、ある一人の少年がISを動かしてしまう。その少年の名は織斑一夏。だがしかし、彼以外にもう一人ISを動かすことができる者がいた。

プロローグ（前書き）

この小説は重度のコジマ汚染患者が書いたものです。苦手な方はマッハでブラウザバックをしてください。

プロローグ

インフィニット・ストラトス

IS、一人の天才が開発したパワードスーツである。従来の兵器をはるかに上回る性能を持つこのパワードスーツには欠点があった。それは、女性にしか動かすことができないというものであった。このことにより、男女平等になりつつあった世界は、一気に女尊男卑の社会となってしまった。しかし、ある一人の少年がISを動かしてしまう。その少年の名は織斑一夏。だがしかし、彼以外にもう一人ISを動かすことができる者がいた。だが、その男はとんでもなく……変態だった。

用語、人物&IS設定

登場人物名

マイケル・コジマ(15)

国籍：フィンランド

使用IS：アクアビットマン

性格：良くも悪くも好奇心の塊

外見：白衣を着たテニスの王子様の乾をご想像ください

本作の主人公、原作主人公である織斑一夏に続く二人目の男性IS搭乗者であり、フィンランドの代表候補生。両親がISの技術者であり、彼も両親のようなISの技術者を目指すため故郷の高専に入学するはずが、ひよんなことから両親の研究所にあったISアクアビットマンを動かしてしまったことにより、IS学園に入学することになった。そのため、彼自身は整備科に行きたいらしく、あまり乗り気ではなかったが、父の「あそこに行けば各国のISを見ることができる」という言葉でようやく行くことを決心したようだ。

用語及び組織、企業設定

コジマ機関

マイケルの両親が所長を務める研究機関。マイケルのISアクアビットマンはこのコジマ機関が独自に作り上げた準第3世代型ISであり、この機関が開発したISの装備は独自の理論が用いられており、非常にピーキーな性能を誇る。

コジマ機関の企業標準ISは ランスタンとランスタンの腕部をコジマライフル搭載型にしたマッドネス

モデルはACC4のアクアビット社

トーラス・エレクトロニクス社

コジマ機関のいわば親会社であるISの開発企業。トーラス社社長エドヴァルド・テレジアはマイケルの父、エミールの学生時代の友

人でもある。その縁からか、コジマ機関の実質的なスポンサー企業でもある。トーラス社の開発したIS及び、装備はコジマ機関同様に極端な性能を持つことで知られている。

トーラス社の企業標準ISはアルギュロス、アルギュロスの腕部をコジマ機関のマッドネスと同じくコジマライフル搭載型のハイドラ・アルギュロス

モデルはACFAのトーラス社

コジマ技術

コジマ機関が発見した未知のエネルギーコジマ粒子をISに転用したもの。「原作AC4やACFAのように環境汚染は引き起こさないことに加えて、原子力以上のエネルギーを生み出す非常にクリーンなエネルギー資源として注目を集めている。」

プライマル・アーマー
PA

コジマ粒子を安定還流し、フィールドのように展開することができる。これを展開していればIS用のマシンガンでさえも、ダメージを与えることができない。

IS設定

IS名：アクアビットマン

世代：準第3世代機 シャルのISであるラファール・リヴァイヴ・カスタム？と同じ世代

設計者：エミール・コジマ マイケルの父、ミセス・コジマ マイケルの母

搭乗者：マイケル・コジマ

待機状態：腕時計

機体のフォルム：アクアビットマンそのもの

武装

右腕：コジマライフル AXIS

コジマ機関が作り出したコジマ技術を使ったライフル。装弾数が少ないことに加えてチャージに時間がかかる等の難点はあるが、一撃でも当たれば大抵のISを撃破する事が可能である。

左腕：プラズマライフル FLUORITE
コジマ機関の提携企業であるトーラス社が制作したプラズマライフル。装弾数も多く威力が高いことに加え、着弾するとECMを発生させることができる。

両肩：PAチャージャー ADDICT

文字通り、戦闘などで消費したコジマ粒子を急速にチャージする事が出来、PAを回復させる事も可能なサポート兵装

右背中：コジマキャノン ARSENIKON

コジマライフルのキャノンバージョン、装弾数やチャージに時間がかかる等の弱点はそのままだが、威力は倍増している。

左背中：垂直コジマミサイル ZINC

垂直発射されるコジマミサイルで若干弾速が遅いものの、その弾速の遅さを生かした時間差攻撃が可能。

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力は不明

なお、このアクアビットマンを見たIS学園の教師であるT・O教諭はこの機体を緑色の光を放つ変態だったと後に同僚の教師に語っている。

第1話 クラスメイトは全員女 + 変態技術者（前書き）

最初に謝ります。投稿が遅れてごめんなさい。こんな駄文でもよろしく願います。

基本的に投稿は週一で2話ずつで行くつもりです。

第1話 クラスメイトは全員女 + 変態技術者

「IS学園」この教育機関は、未来のIS搭乗者を育成するために設立された半軍事半教育機関である。

そして今年も、新たな生徒たちがこの学園の門をくぐってきた。だが、それ以上に今年はある意味で波乱な一年の始まりだったといえるだろう。何故ならば、男でISを扱える人物が2人も現れたのだから。

（SHR）

一夏side

「こ、これは面倒な事になった……」

俺こと織斑一夏は、ひよんなことからISを動かしてしまい、半強制的にこの学園に入れられてしまった。何故俺がこんなに慌てているのか、俺の周りにいる生徒たちがほぼ女子しかいないからだ。ISというのは、女性にしか動かすことができない。この理由によって現在の社会は女尊男卑の世界になったと言ってもいい。だが、俺はもう一度言うが、「ひよんなことといっても、入試会場を間違えてしまったという事なのだが」何故か俺はISを動かしてしまった。でも、まだこのクラスに男が俺一人ではないという事だけでも俺の精神衛生上、マシだった。

「ら、くん、織・君・織斑くん？」

「どわあ！？な、何だ！？」

「じじじじめんね、織斑君。次は織斑君が自己紹介の番なんだよね。いいかな？」

と俺に話しかけたのはこのクラスの副担任である山田真耶だった。さつきからボーっとしていた俺にずっと話かけていたようだ。

「あ、すいません。今やります。」

「本当ですね？絶対ですよ!？」

うーん、いまいち山田先生ってあんまし年上に見えないなと思いつつ、俺は自己紹介を始めた。

「織斑一夏です。よろしくお願いします。」

ペコリ。

だが、周りの女子たちは「え？これだけ?」とか「もつと何かないの?」みたいな視線を俺にぶつけてくる。いかん、このままだと暗い奴だと思われてしまう。と俺のゴーストがささやいた。

「以上です。」

よし、決まった!と思ったが、周りの女子たちは一斉に大コケした。すると、頭上からナニカが降ってきた。

ズガン!!

「げえ、親方様!？」

「誰が、親方だ。私は天下統一などに興味はない。それとあいさつもまともにできんのかお前は。」

衝撃とともに上から馴染みの声が聞こえ、上を見るとスーツを着た俺の姉が出席簿らしきもので俺をたたいたようだ。

「あつ、織斑先生。職員会議はもう終わったんですか？」

「ああ、ホームルームを押しつけてしまつてすまないな山田先生。」

「いえいえ、これくらい当然です。」

と山田先生は嬉しそうに言っていた。

「さて、諸君。私が担任の織斑千冬だ。この一年間で君たちにはI S搭乗者としてのスキルと知識を身につけてもらう。出来ても出来なくても返事は「はい」と答える。出来ない者はできるまでみっちり教えてやる。いいな！」

と俺の姉である織斑千冬がまるでどっかの軍隊の教官ばりの訓示だった。すると周りから黄色い歓声が聞こえた。台詞はとんでもなくはっちゃけていたものもあつたのでここでは、一部抜粋したものをのせる。

「きゃー、本物の千冬様よ！」

「私、お姉様にあこがれてこの学園に来たんです。北九州から」
等の黄色い歓声がとびかつた。

「全く、毎年毎年こんな馬鹿どもが来るんだ。まさか、狙ってるわけでもあるまいし。」

千冬姉はうんざりしたような表情を浮かべ、山田先生は「あはは・・・」と苦笑いをしていた。

「では、次の生徒自己紹介をしる」

と千冬姉は俺以外にもう一人の男性でISを扱える生徒に自己紹介をするように命じた。

マイケル side

ふむ、ようやく私の番か、と私ことマイケル・コジマは軽く息を吐きながら席を立った。

「はじめまして、マイケル・コジマです。趣味は機械を整備することです。それ以外だとチェスが好きです。色々と至らない点があると思いますが、よろしくお願いします。」

まあ、自己紹介とはこんなところだろうかと私は思いながら席に座った。するとまた何故か黄色い歓声が上がった。

「きゃー！イケメンのメガネ男子！」

「ふふふ、夏の新作は彼と織斑くんの絡みで決まりね」

など、ん？最後の新作とは何だ？と思いつつスルーした。

（休み時間）

彼こと織斑一夏が私の席にやってきた。私は内心で好都合だと思った。私自身が彼の席に赴こうと思っていたからだ。

「よお、俺は織斑一夏。よろしくな。」

と彼は私に握手を求めた。私も彼の握手に応じるように

「マイケル・コジマだ。織斑一夏、面白い人材と聞いている。期待させてもらう。」

と言い、私は彼と握手を交わした。すると、彼は一瞬キョトンとした表情だったが、ふと我に帰り、

「面白い人材って何だよ？そりゃ。」

とたずねてきた。

「いや、すまないな。男でISを動かせる人物と聞いていてな。気に障ったのなら謝ろう。」

まあ初対面の人間に面白い人材と言われたら、そうなるなと思いなから私は謝罪した。

「そんな事俺は気にしてないからさ。よろしくな！」

彼は満面の笑みでそう答えた。すると、

「ちょっと、いいか？」

という少女の声が聞こえた。

私と一夏が声の聞こえた方向を向くと、長い黒髪をポニーテールに結んだまるで抜き身の日本刀のような雰囲気をもった少女がいた。名前は確か、篠ノ之箒だったか

「ん、どうしたのか、私か彼に用があるのか？」

と私が尋ねると彼女は首を縦に振り

「一夏に用がある。」

と一言だけ告げた。

「箒か、久しぶりだな!」

と一夏は嬉しそうに言った。一方箒は少し顔を赤らめ、

「ああ、久しぶりだな。それとそっちにいるのは?」

と箒が一夏に私についてたずねたので

「マイケル・コジマだ。よろしく頼む」

と彼女に告げた。

「篠ノ之箒だ。こちらこそよろしく。すまないが、一夏に用があるので彼を連れて行っても構わないか?」

と彼女は言った。

「なるほど、君の知り合いか。なら二人とも積もる話もあるだろう。一向に私は構わんよ。」

「それじゃ、後でな」

と一夏は箒と共に教室を後にした。その後私は何故かクラスの女子

からの質問攻めにあってしまった。

第1話 クラスメイトは全員女＋ 変態技術者（後書き）

各人物の台詞の元ネタ

一夏

「これは、面倒なことになった。」

ACPPのステインガーが最後にやられたときにいった台詞

「げえ、親方様!？」

織斑千冬役の豊口めぐみ氏が演じていたアニメ「戦国乙女桃色パラドックス」の織田ノブナガの尊称から

マイケル

「面白い人材と聞いている。期待させてもらう」

AC4のイクバル魔術師ことサーダナの迷台詞である「面白い素材と聞いている、期待するぞ」から

ISレポート Chapter 1 - 1 (前書き)

連続投稿です！この小説は基本的に話とマイケルのIS学園での生活をレポートにまとめたISレポートの順に話が進んでいきます。

マイケル・コジマのISレポート

題「織斑一夏」

織斑一夏、彼は良くも悪くもこの世界にとってのイレギュラーな存在かもしれない。何故ならば、この女尊男卑の世界を変えるかもしれない無限の可能性を秘めているからだ。まさに「可能性の獣」といったところだろうか。しかし、彼の立場は非常に危ういかもしくない。全世界の男性にとって彼と私は最後の希望と言えるが、現体制を支持する女性達からはこの世界を破壊しかねない危険なイレギュラー要素と認識されるだろう。最悪、彼を暗殺しようという過激な事が起きるかも知れない。一応彼がIS学園にいる3年間はその危険はないと思われるが、各国からの代表候補生の生徒達は彼を籠絡するように命じているかもしれない。私個人としては、彼は非常に興味深い人物である。もしかしたら私のIS「アクアビットマン」と彼のIS「おそらく彼にも専用機が与えられるはずだ」が共に解析され、将来的には男性でもISを動かすことができるかもしれない。もちろん、私もIS搭乗者兼技術者としてこの世界の不条理と理不尽を無くすために戦うつもりだ。

題「篠ノ之箒」

篠ノ之箒、彼女はISの発明者であり天災と揶揄される篠ノ之束の実の妹である。だが、彼女もまた篠ノ之束が開発したISによって人生を狂わされた人物の一人であるようだ。学園のデータベースにアクセスした所、彼女は、篠ノ之束博士が行方をくらました後からIS学園に入学するまで、延々と日本各地を転々と回っていた事に

加え、日本政府から姉の行方を半ば尋問のような形で証言を求め続けられていたようだ。そのため、彼女自身も篠ノ之博士を嫌っている節が見られる。恐らくだが、彼女が常に近寄り難い雰囲気纏っているのはこれが原因なのかもしれない。それ以外に彼女は織斑一夏に恋愛感情を抱いているようだ。現に彼に話しかけられた時に彼女は顔を赤らめていたし、心なしか嬉しそうだった。だが、織斑一夏は彼女のことを単なる幼馴染程度に思っていないようだ。彼女の彼に対する気持ちは織斑一夏に届くのだろうか？少なくとも、私個人は彼女の恋路を応援するつもりだ。

ISレポート Chapter1-1 (後書き)

何かご意見や感想があればどしどしお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6082x/>

インフィニット・ストラトス～舞い降りるコジマの天使～ザ・アクアビットマ

2011年11月16日20時54分発行